

学位論文題名

人麻呂歌集略体歌研究

学位論文内容の要旨

韓氏の論文は、万葉集におさめられている、所謂人麻呂歌集についての研究である。

万葉集最大の歌人柿本人麻呂の名前を冠されるこの人麻呂歌集では、はっきり異なる二種類の表記スタイル—通常略体・非略体と呼ばれる—が区別される。また、その収録歌の制作年代については、人麻呂の関与の有無に関連して、様々に議論されてきたところである。本論文も、こうした問題関心に、真正面から取り組んだものであり、しかも、従来の研究の枠組みに果敢に挑戦を試みたものである。

長らくこの人麻呂歌集に関する研究の主流をしめてきたのは、稲岡耕二氏を中心とする表記史の面からの研究である。これは、歌集表記を漢字による日本語表記の初期の段階に位置付けようとするものである。が、近年、木簡などの文字・表記資料の新たな発見により、この研究の方向は限界を露呈し始めており、新しい観点からの研究の刷新が模索されているのが現状である。その中で、表記史の面からのアプローチの持つ限界を乗り越える方向として、かつて行われていた歌の素材・発想の特徴など、内容面からの検討の可能性が再評価されようとしている。韓氏の研究は期せずしてまさにそうした動向を機敏にとらえたものとなっており、まことに時宜にかなった、新しい研究の方向を指し示した業績であるといえる。

韓氏は、まず序章的な位置付けの第一章で、上述のような従来の研究動向を通観した後、第二章では、両様の表記スタイルのうち、いわゆる非略体歌について、その制作年代を検討することから始める。そして、稲岡氏らによって天武朝後半から持統朝初期に位置付けられていたその制作年代に疑問を呈する。すなわち、巻一〇秋雑歌部七夕歌2033歌の左注の「庚辰年」なる記述や、巻二146歌題詞の「大宝元年」という作歌年時など、わずかに付された左注や題詞の慎重な検討から、その制作年代は通説よりも遅く、むしろそれは持統・文武両朝のあわいあたりに定位されるべきものであるとする。このうちとくに前者—「庚辰年」の記述—については、従来無反省に人麻呂歌集の年代観の決定に用いられてきただけに、韓氏の批判的考察は今後論議を呼ぶことになるろう。

一方、本論の主対象である略体歌については、原則として題詞・左注を欠き、そうした作歌年代等の記載をいっさい欠いているので、制作年代の推定にはいっそうの困難が伴う。そこで、韓氏はその略体歌の大部分を占める相聞歌について、素材・発想などの面から詳細な分析を試みることによって、この問題にメスを入れている。すなわち、第三章では、「枕」「袖を濡らす」「恋死に」「命」「片思ひ」をはじめとする多数の歌語や、あるいは発想類型が、また第四章では夢や、「手向

け」「うけひ」「みそぎ」、あるいは「紐解く（解ける）」「占ふ」といった俗信を素材とする歌々が検討に上せられる。韓氏は、それらの発想・表現の特徴を万葉集の歌風等の変遷に照らした場合、略体相聞歌は、従来通説となっている人麻呂を含む前期万葉—ほぼ奈良遷都以前—よりは、むしろ奈良朝の、すなわち後期万葉の相聞歌に近い性格を有していることを検証する。そして、これらの考察を通じて、稲岡が主張し、また近年の学界の大勢になっていた人麻呂関係歌の制作年代の相互関係、すなわち略体歌—非略体歌—人麻呂作歌という展開の見取図には従い難いと指摘する。これは人麻呂歌集をめぐる学界の現状に対する大きな異議申し立てと評価できるものである。以上の二章が名実ともに本論文の中核をなすものといえよう。

また、略体歌集の歌集としての本質については、第五章で検討する。すなわちそれが、他の「虫麻呂集」「金村集」「福麻呂集」など、いわゆる「万葉の私家集」とは、性格を異にする相聞歌の撰集であると考えられること、歌風の上から明らかに後期万葉の特徴を有しているが、その一方で、歌集所出歌を多く含む巻十一・十二の構造などから見て、第四期には既に歌集として成立して、同時代の歌人たちにとって規範的な—すなわち作歌の手本としての—性格を獲得していたと見られること、を明らかにする。さらに同章では、こうした全ての考察を総括して、略体人麻呂歌集の成立を論じてもいる。すなわち略体人麻呂歌集は、その形成期を万葉集第三期、すなわち奈良遷都から天平初年までとする、独自の性格の相聞歌集であったと推定するものである。これらは、従来の人麻呂歌集研究には見られなかった視点と結論であり、高く評価できるものである。

なお、第六章は付録として歌語「鮎」をめぐる考察を収めている。主として第三期以降の作品について論じたもので、直接に人麻呂や人麻呂歌集について論じたものではないが、歌語の分析における韓氏の力量を示すものとして評価できる。この論はすでに単発の論文として公表され、学界で一定の評価を得ているものである。

このように、韓氏の論文の主張は、近年通説化していた人麻呂歌集観に鋭く反省を迫っており、独自性を十分に発揮している。そして、その研究の方向は今後の人麻呂歌集研究に大いに寄与するもので、学界を刺激し、また裨益するところが極めて大きいと思われる。

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである（各節の題名は省略）。

第一章 序論—研究史と問題点—

第二章 人麻呂歌集年代推定の資料—非略体歌—

第三章 人麻呂歌集略体相聞歌の表現（一）—素材と発想—

第四章 人麻呂歌集略体相聞歌の表現（二）—素材と発想—

第五章 略体人麻呂歌集の成立

第六章 付 録

（400字詰原稿用紙換算約668枚）

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽
副 査 教 授 須 藤 洋 一
副 査 教 授 富 田 康 之

学 位 論 文 題 名

人麻呂歌集略体歌研究

審査委員会は、本論文が提出されて以後、たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また長時間にわたる口述試験を実施して、十分に審議を重ねて適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、韓圭憲氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達して、文学研究科教授会に報告した。教授会はこの報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

韓氏の論文は、万葉集におさめられている、所謂人麻呂歌集についての研究である。

万葉集最大の歌人柿本人麻呂の名前を冠されるこの人麻呂歌集では、はうきり異なる二種類の表記スタイル—通常略体・非略体と呼ばれる—が区別される。その性格の如何、人麻呂との関わり等が研究上の主要な問題関心となってきた。本論文もまた、この問題に真正面から取り組み、なおかつ、従来の研究の枠組みに挑戦するものである。

この歌集に関する研究の主流をしめていた稲岡耕二氏を中心とする表記史の面からの研究は、近年、木簡などの文字・表記資料の飛躍的な増加により、限界を露呈しており、その限界を乗り越える方向として、歌の素材・発想など、内容面からの追及が改めて求められている。韓氏の研究はまさにそうした動向を機敏にとらえたものであり、その点を審査委員会は高く評価するものである。

韓氏は本論文でまず、人麻呂歌集を構成する二種類のうちの、非略体歌について、その制作年代を検討することから始める。韓氏は、従来、表記史的な観点から天武朝後半から持統朝初期に位置づけられていたその制作年代について、より実証的なアプローチを試み、わずかに付された左注や題詞の慎重な検討から、むしろそれよりは一世代後の、持統・文武両朝に定位すべきものであるとする。これは、先入観を排して実証的な方法により問題を解決しようとする試みと評価できる。

一方、本論文の主対象たる略体歌については、方法を改めて、その大部分を占める相聞歌について、むしろ素材・発想などの面から詳細な分析を試みている。その結果、それらの特徴を万葉集の歌風等の変遷に照らした場合、従来通説となっている人麻呂を含む前

期万葉—ほぼ奈良遷都以前—よりは、むしろ奈良朝の、すなわち後期万葉に近い性格を有していることを検証する。そして、これらの考察を通じて、稲岡らが主張し、また近年の学界の大勢になっていた人麻呂関係歌の制作年代の相互関係、すなわち略体歌—非略体歌—人麻呂作歌というような、縦並べの展開の見取図には従い難いと指摘する。これは学界の研究の現状に対する大きな異議申し立てと高く評価できるものである。

さらに進んで、韓氏は略体歌集の本質についても考察する。その結論として、略体歌集は非略体歌集とは異なり、他のいわゆる万葉の私家集（金村集、虫麻呂集、福麻呂集）などとは性格を異にする、相聞歌の撰集であると考えられること、また、その所収歌は、素材、発想などの歌風の上から、明らかに後期万葉の特徴を有しているが、その一方で、歌集所出歌を多く含む巻十一・十二の構造などから見て、第四期には既に歌集として成立しており、同時代の歌人たちにとって規範的な、すなわち作歌の手本としての性格を獲得していたと見られること、等の理由から、その形成期を万葉集第三期、すなわち奈良遷都から天平初年までとする、独自の性格の相聞歌集であったと推定する。これは、従来の人麻呂歌集研究には見られなかった視点と結論であり、高く評価できるものである。

このように、韓氏の論文の主張は近年通説化していた人麻呂歌集観に鋭く反省を迫っており、その研究の方向は今後の人麻呂歌集研究に大いに寄与するもので、学界を刺激し、また裨益するところが極めて大きいと思われる。